



授業づくり講座について

今年度も、「すぐに使える」「実際の授業をイメージできる」という点に重きを置き、「授業づくり講座」を開催します。第1回は、6月4日(木)に、開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、開催を見送りました。そのため今回は、第1回の授業づくり講座において、講師の方から説明していただく予定であった社会科の授業づくりについて紹介します。

【小学校】講師：高木小学校 奥井 祥太 先生

☆学習問題とは!? (『社会科の授業デザイン』著者 澤井陽介 東洋館出版 2015)

定義1: 社会的事象の特色や意味、概念等に関する知識に迫るために、子どもたちが調べた事実をまとめた問題

定義2: 目標に辿り着くための道しるべになるような問題

(単元の単なるスタートでもなければ、目標の裏返しでもありません。)

文型: 「どのように(な)〜」「なぜ〜」「どちらが(何が)〜」「どうすれば〜」

「いつ」「どこで」という問題だと、単発の答えになってしまい、見方・考え方を働かせることが難しいです。また、「調べよう」「考えよう」という指示するような学習問題では、答えを導きにくくなるだけでなく、調べる内容もあいまいになってしまいます。



【中学校】講師：藤森中学校 有我 悟 先生

単元「身近な地域の調査」は、なかなかじっくり取り組むことができない単元の1つです。昨年度2年生を担当された先生の中には、新型コロナウイルス感染症の影響で3年生に持ち越してしまった方もいるでしょう。現在の状況では、学区調べでインタビューは難しいかもしれません。そこで、今回は誰でも手に入れることができる統計データを活用した授業を考えてみたいと思います。データは各区のホームページに載っていますが、区によって形式が異なります。もとのデータは、名古屋市のホームページで閲覧できるので、それを学区の特色に合わせて加工するのがよいと思います。

授業づくり講座の詳細は、名古屋市社会科同好会ホームページにも掲載しております。

また、今後の授業づくり講座は、以下のように進めていく予定です。ぜひご参加ください。

回	開催日	講師
2	9月15日(火)	大賀 信明先生(滝川小学校) 牛島 康太郎先生(宮中学校)
3	1月22日(金)	余合 弘先生(鶴舞小学校) 関 真輔先生(守山西中学校)

【第282号 紙面】

授業づくり講座について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(p1)
 若手躍動 授業力アップ研修報告・・・・・・・・・・・・・・・・(p2)
 子ども輝く社会科授業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(p3)
 『日々雑感』平和が丘小学校 木村 暁子先生・・・・・・・・(p4)
 今後の予定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(p4)

若手躍動 授業力アップ研修報告

本年度も、6年目までの若手会員を対象に、社会科を中心に様々な授業や教師としての力量向上を目指して、授業力アップ研修を行っていきます。今回は、小5グループによる研修の様子をお伝えします。

小5グループ

リーダー

原小学校 本間研見 先生

メンバー

吉根小学校 廣江晃平 先生

植田東小学校 鈴木寛規 先生

田代小学校 諏訪直哉 先生

高針小学校 和島良太 先生

蓬莱小学校 安藤勇人 先生



<話題> 社会科の授業を行うときに、教材研究をどのようにしたらよいのか？



インターネットで教材研究をしていると、大量の情報がでてきてしまう。多くの情報から、どのように取捨選択するとよいのか。



社会科の教材研究をしていると、教えたくなることが、とても多くなってしまいます。インターネットの情報なので、信ぴょう性が不確かなので、何を教えてよいのか迷ってしまいます。

情報を取捨選択する際には、そこから何を伝えたいのかを常に意識することが大切。しかし、インターネットで教材研究をするのも一つの選択肢であるが、社会科教師として、生の声を聞くことを大切にしてほしい。自分から連絡をとって取材をしたり、現地を訪れたりする中で、教材研究が深まることが多い。



社会科同好会の会員であるからこそ、縦と横のつながりを十分に活用することも大切にしたい。優れた教材研究をしている先生が数多くいる組織であるから、積極的に声を掛け、魅力的な教材を教えていただくことも、教材研究をする上で大切であると思う。

小5グループの授業力アップ研修では、教材研究のほかにも、メンバー全員が実践計画を持ち寄って検討をしたり、「子どもの実態把握の方法」について悩みを共有したりするなど、様々な話題を基に話し合いが行われていました。

今後も、授業力アップ研修グループの様子を同好会ひろばで随時お知らせしていきます。



子ども輝く社会科授業

魅力あふれる教材を開発し、子どもが輝く社会科授業。



そのような授業を日々積み重ねておられる会員の先生方の実践を紹介します。

「名古屋大好き」という気持ちを育む教材開発 楠小学校 岡田健吾先生

名古屋市が行った都市ブランド・イメージ調査報告書によると、名古屋市は「魅力がない都市 No1」という結果になっている。しかし、私は、子どもが大きくなったとき、目を輝かせて「名古屋が大好き」と言って、名古屋の魅力を語れるような大人になってほしいと願っている。そこで、社会科の学習を通して、名古屋を愛していた先人の願いに触れさせることで、子どもに名古屋を好きになってほしいと考え、名古屋城について教材開発し、3年生「市の様子」の実践を進めた。

まず、導入では、過去と現在の名古屋城の写真を比べさせた後で、戦争で焼失した名古屋城を再建するのに、総工費6億円かかることを調べた。その6億円のうち2億円が市民の寄付であったことが分かったと、「戦争で貧しいはずなのに、なぜ2億円も寄付が集まったのだろう。」と疑問の声が上がった。次に、「名古屋城再建 金のシャチホコに託す」という映像を活用して調べていくと、「名古屋城再建は復興のシンボルだ」という名古屋を愛する市民の気持ちを捉えていくことができた。その後、現在では、その復興のシンボルである名古屋城を、木造で建て直す計画があるという事実と出会った。木造建築に対する賛否について調べていく中で、どちらの意見にも名古屋を愛する気持ちがあることを捉えることができた。単元の終末には、「これからの名古屋城について考えていくのは、自分たち自身であることが分かった。昔の人たちが大事にしてきた名古屋城を大切にしていき、大好きな名古屋の魅力を伝えていきたい。」と名古屋への愛着を表現する子どもの姿があった。

「新潟のコメは、新潟港から輸出できない!？」単元のシンボルを探す教材開発

明豊中学校 塚田一生先生

「新潟でとれたコメは、新潟港から輸出できない!」という新聞記事を単元の導入で取り上げた。「新潟でとれたコメを、北海道で消毒してから、横浜港に運んで、横浜から中国へ輸出するなんて無駄じゃん!」「作った物を自分で売れない。だから新潟がさびれる。」などと過疎化や、農家の高齢化に直面する新潟の人々に同情する生徒の声が聞こえてきた。

私は、教材開発をする際に、単元のシンボルになるようなものがないかを考えるようにしている。2年生単元「世界から見た日本の姿」は、人口問題や、産業構成の変化、貿易による世界と日本の結びつきについて学習する単元である。「人口問題」は、日本の人口減少、コメの消費料の減少。「産業構成の変化」は、農家の後継者不足、耕作放棄地。「貿易による結びつき」は、中国で日本の農作物が高値で売られていること。教科書を開きながら、「このページもコメに関係づけられそうだな・・・」などと考えながら、「あ、コメでこの単元はいけるな!」と確信をもった。

単元末には、単元を貫く学習課題「新潟のコメは、新潟港と横浜港のどちらから輸出すべきか?」で立場討論をした。新潟港側の生徒からは、「日本海側のコメを新潟に集めて輸送したらよい」という意見。横浜港側からは、「日本中のコメを一か所に集めて輸出した方が一度に運べてよい。」などの意見がでた。職業病かもしれないが、テレビを見ている、本を読んでも、「これは、どの単元のシンボルになるかな?」と考えるのが癖になっている。

日々雑感

『無理なく、ゆるやかに、みんなと一緒に』

平和が丘小学校 木村 暁子 先生



10年前の夏、研究員の長期研修で仙台市の小学校を訪問した。そこでお会いした教頭先生は、ご自身が実践された「仙台の七夕祭り」を例に、子どもたちの祭りへの参加が続いていくためには、授業で学んだことを放課後教室やクラブ活動といった大きな枠組みの中で七夕飾り作りを進めていくと無理なく続いていくこと、そして子どものときに地域の行事に参加した経験は、大人になったときの社会への参画意識につながっていくのではないかと話してくださった。また「仙台は海が近いから、海のものおいしいのよ」とお寿司をご馳走になりながら、「この指とまれ」方式でゆるやかに保護者・地域とつながっていくPTA活動、職員みんなで一歩を踏み出す校内研修といった実践以外のこともたくさん教えていただいた。どうすれば、そういったことができるようになるのかを尋ねたところ、「少しずつ理解を得ていくこと。無理なく、今できる方法で取り組んでいくといい。」と答えてくださった。

帰りの新幹線の中で、自分がこれから年齢を重ねていくときに、子どもたちとともに、教師として私も成長もしていきたいと思った。

昨年度末からの新型コロナウイルス感染症対策で、従来どおりという概念を一度外して、行事や子どもたちの生活や活動について、何が大切か、どのようにみんなで進めていくのかを、様々な観点から役職で検討した。その渦中に4月から今の学校に転勤し、今度は教頭としての立場で出校日のあり方や学校再開に向けたガイドライン等について検討し、全職員で進めていく毎日だった。子どもたちが登校してきた今となっては、過ぎてしまったことだが、そのときの自分はどうだったのだろうか。幸いにも、職員の方々が意図を汲み取って準備を進めてくださり、地域の方々が3か月ぶりの子どもたちの登下校を見守ってくださったことに助けられ、なんとか始めることができた。

これからも、今年は特に様々な変化に対応していくことになると思う。しかし、自分の仕事を進めていくときに、仙台の女性の教頭先生から言われた言葉を時々思い出し、「無理なく、ゆるやかに、みんなと一緒に」進めていきたい。

～今後の予定～

- 7月27日(月) 18:30～ 小学校部会(ウイルあいち)
- 7月29日(水) 18:30～ 中部会部会(中小企業振興会館)
- 9月7日(月) 19:00～ 小学校部会・中学校部会(教育館)
- 9月15日(火) 18:45～ ステップアップ研修全体会(教育館)
- 19:00～ 授業づくり講座(教育館)

※ 今年度のフィールドワークは、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、推進部員を中心とした少人数でのフィールドワークとして実施します。